
守護と魔法とエレメント

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護と魔法とエレメント

【Nコード】

N2238Y

【作者名】

原石

【あらすじ】

私立海宝学園に通う普通の高校生である香坂龍馬は部活の帰りに自分の家の前でぼろぼろの状態で倒れている青髪の少女と出会う。そして龍馬はその少女と出会ったことにより邪霊くソルマットと呼ばれる敵との戦いに身を投じていく

キャラ紹介<ネタバレあり>(前書き)

ずっと書いてみたかったお約束の展開のオリジナル小説。

更新は遅いと思いますがよろしくお願いします

キャラ紹介<ネタバレあり>

香坂 龍馬<こうさか りょうま>

年齢：16歳

身長：165cm

体重：53kg

誕生日：7月18日

所属の部活：弓道部

使用武器：破邪の氷弓<アイシクルブリザード>

所有属性：氷

寝癖のようなダウンナーヘアを持つ普通の高校二年生。

よく友人に『邪眼』と呼ばれるぐらい目に力が無い。

二枚目とは言われないがカッコいいとはよく言われる。

とてもダウンナーな性格をしているがツツコミのキレがある。

剣道部に所属している幼馴染によく竹刀で攻撃されている。

弓道の腕前は一年の中ではトップ。

家の前で倒れていた精霊<エレメント>のカインを助けたことにより、カインの守護者<パートナー>として戦いに身を投じていく。

口癖は『お前の時を凍らせてやる』

カイン「ステイト

年齢：16歳<というようにしている>

身長：163cm

体重：？

誕生日：？

所属の部活：弓道部<マネージャーとして>

使用武器：氷魔法

所有属性：氷

青い髪の毛のロングヘアで目は脱力系のダウンアイ。

氷を司る精霊<エレメント>

龍馬の家の前で邪霊<ソルマツト>の攻撃によってボロボロの状態
で倒れているところを龍馬に救われる。

龍馬を守護者として選び、邪霊から世界を守るために戦う。

胸が小さいことを気にしており、龍馬の幼馴染と弓道部の部長と胸
を見てはため息をついている。

性格はとても無機質だが人並みの感情はある。

口癖は『永遠に凍ってください』

キャラ紹介<ネタバレあり>(後書き)

次回から本編開始です

プロローグ

【邪霊<ソルマツト>】

それは異世界からこの世界を征服するために送り込まれてきた存在たち。

巨大な獣のような外見をしたものや人間と見た目あ全然変わらないものまで様々だ。

邪霊に一貫して共通していること。

それは
とても強力なチカラを持っているという
こと。

そのチカラは人間なんか到底及ばないほどのチカラ。

邪霊はすぐに人間界を征服できた。

それを邪魔する存在が居さえしなければ。

この世界は自分を守るためにある一つの存在を生み出した。
彼らの名は

【精霊<エレメント>】

精霊は自分たちが選んだ人間と協力して邪霊たちを討伐していった。

それに対抗する邪霊も多々いた。

精霊と人間対邪霊の大きな戦い。

それが【世界の混乱<エンドウォー>】の始まり。

そして精霊に選ばれた人間を後にこう呼ぶ

【守護者<パートナー>】と……………

第1話

『はじめ!』

部長の合図で二歩前に踏み出して軽く一礼。

そして一歩大きく踏み出して体を右に向けて肩幅より広く足を拡げる。

その時に重心を体の中心にやるのを忘れないようにするのが大事なポイントだ。

右手に持った四本の矢の内二本を床に並べて置く。

左手に持った弓を左太ももにそるような形で自分の前に真っ直ぐ立てる。

それと同時に右手に持った日本の矢の内、甲矢やはと呼ばれる方の矢を十文字型になるように番える。

そして残った矢を番えたやと逆の方向を向けてその矢の下に差し込む。

「ふうー……」

一息ついて自分が射る的を見据える。

そして再び視線を番えた矢に戻して下に差し込んでいる矢を右の薬指と小指で掴んで右手を腰骨の上に置く。

そこから右手の親指、人差し指、中指で番えた矢を掴んで【弓構え】。

パアアアン!

俺の二個前の的が射ぬかれる音が弓道場内に響き渡る。

多分、みそれ裏先輩だろうな。相変わらず早気が治らない人。

まあ、欠点と祝えている早気を欠点と言わせないぐらいの実力を持つているから誰も文句は言わない。

おっと、集中集中。

【弓構え】の体制のまま顔を左に向けて的を真っ直ぐ見て【物見】。そこから縦に円を描くように左手と右手を振り上げて【打ち起こし】。

左手を的の方へ向けて【大三】。

そして弓の弦が右耳の後ろを通る様に弓を弾いて【引き分け】。

そして【会】と呼ばれる構えのまま5秒待つ。

5…4…3…2…1…【離れ】。

パアアン！

俺が放った矢は見事に的の真ん中を射抜いていた。

「（よし！）」

そして残りの三本も的の真ん中の輪に的中させる。

これで四射ちゅう四本的中させたことになる。

これを弓道では【皆中】と呼ぶ。

部長曰く、入部して二か月しか経ってないこの時期にここまでの実力があるのは珍しいらしい。

あ、部長ってのは例の囊先輩のこと。

あの人の弓道の实力は別格だ。

初めて矢を的に向かって放った時から一発も外したことが無いらしい。

超能力でも使ってるのか？

「相変わらずスゴいな。龍馬」

「囊先輩ほどじゃないっすけどね」

俺より先に四本撃ち終えていた雲先輩が話しかけてきた。
彼女の名前は佐々木雲<ささきみぞれ>。

この弓道部の部長だ。

容姿端麗、文武両道、成績優秀、スタイル抜群。

もはや神様の分身なのでは？と疑問を持つぐらい完璧な先輩に何故か俺は気に入られた。

先輩曰く、『お前のキャラが気に入った』らしい。
よく分らん。

「龍馬。まだ私のことを『みーちゃん先輩』とは呼んでくれないのか？寂しいな」

「呼ぶかバカ。俺は後輩つすよ？ そんなタメ口で話せるわけないつしょ」

「今しれつとバカと言った奴のセリフかそれが。……ふう、タオルを取ってくれセリオ」

「はいはい」

雲先輩に真つ白なタオルを渡したこの女性の名はセリオ＝スタンロツド先輩。

この弓道部のマネージャーの一人だ。

まあ、この人は雲先輩の専属マネージャーっぽくなってるけど。

「相変わらず用意が良いつすね。流石セリオ先輩」

「いやあ、そんなことないよー？ 偶然だよー」

ああ……癒される……普段から無駄に元気のいい幼馴染の相手ばかりしてるからこのほんわかキャラが俺の心を温めてくれる……

「さて、そろそろ終礼時刻だな。みんな！片づけをして下校だ！」

『了解です』

雲先輩の掛け声ですぐさま片づけをして俺たちを帰路についた。
この部活の結束力はこの学校一らしい。

しりつかいほうかくえん
私立海宝学園。

それが俺が通っている学園の名だ。

総生徒数600人の小さな学園。

俺はその1年3組に在籍している。

この学園を選んだ理由は家から近いから。

こちら辺でそこそこの学力を誇る海宝学園に入学するために結構必
死で勉強した。

まあ、その反動で今は全くと言っていいほど勉強してないけど……
っていうかあの学園に入るの俺だけかと思ってたのに詩織しおりと竜哉たつやと
冬威ふゆいまで入学してたな。

あ、詩織と竜哉ってのが俺の幼馴染。二人とも小学校からの腐れ縁
だ。

冬威ってのは俺の双子の弟だ。

俺と違って活発な性格のアイツは意外とモテる。

まあアイツは鈍感だから気づいてねえけど。

竜哉は見た目が暗いキャラだからモテない。

でも最近何故か真紅の髪を持った同級生の少女が隣にいるようにな

った気がする。
ってか真紅って……いや確かにセリオ先輩の髪も黄色で変わってるしテニス部のマネージャーであるえっと……何て言ったっけな……とにかくそのマネージャーの髪の色も翡翠色だ。
アニメかよ。

「さてと……今日の飯は何にすっかな……」

俺の両親は仕事の都合で海外を飛びまくってる。

どんな仕事をしてるかって？ 俺も知らん。

でも結構毎月纏まった金が送られてくるから儲かる仕事なんじゃねえの？

「よし……やっと着いたな

ん

？」

家が目で確認できるぐらいの距離に辿りついたときに俺は違和感を覚えた。

何故か家の前に氷のような透き通った水色の髪の少女が俯せで倒れている。

まさか発作とかで倒れたのか？

「お、おい！大丈夫か！？ えつとそうじゃないまずは家に上げてから応急処置を………応急処置？」

発作の応急処置って何だ？

っていか今何も考えずに出たぞこの言葉。

ぬるっ

ん？　なんか手がぬるつとした。
気になったので片手を顔の前に出してみた。

「な、なんだよこれ……」

出した俺の手のひらには真っ赤な液体が大量に付着していた。

俺はこの液体を知っている。

この液体は間違いなく【血】だ。

なんでこんなところで血まみれになってんだよ！

「通り魔なんかに襲われたか？　まあまずは家に上げよう。こんなところに放置しとくのは絶対に拙いしな」

俺はその少女を背負って鍵を開けて家に入った。

この時の俺はまだ知る由もなかった。

この少女を助けたことであんな戦いに巻き込まれていくことになる
なんて………

「とりあえずこんな感じでいいか……」

血まみれの人間の処置の方法なんか知らないのととりあえず消毒して包帯を巻いた。

「それにしても美少女だなコイツ……」

ただいまソファに寝かせているこの水色の髪の少女の顔は見事に整っている。

なんでこうも俺の周りにはイケメンやら美少女やらが多いんだ？

「……ん？　ここは……」

「やっと起きたか。いやあ、心配したぜ？　あの出血量だから死んでいるかと思っただし」

「えっと……貴方は？」

「ん、俺？　俺は香坂龍馬^{こうさかりゅうま}。私立海宝学園の一年生だ」

「海宝学園……ああ、私と同じですね」

そういえばこの少女の着てる服って海宝学園のブレザーじゃん。

海宝学園は男女ともにブレザーだ。

色は紺。なんともぱつとしないデザインだけどなぜか人気がある。需要ってのはよく分らん……

「ってそうじゃない！　早くここから逃げないと……痛っ」

すると少女が慌てたように外に出ようとした。

ただどあまりに重傷なので歩くことすらままなっていない。

「おいおいお前は動けるようなケガじゃねえよ。少し休め」

「しかしこのままでは無関係な貴方を巻き込んでしまうことになってしまいます！」

要するにこの子は自分の面倒事に俺を巻き込みたくない。
オーケーオーケー理解した。
けど……

「えつともしかしてだけど……あの俺ん家の庭に立っている変な生き物絡みかな？」

「え？」

えつと……まことに説明しにくい物体が俺の家の庭に突っ立っている。

「一つ言っておく。あんな気色悪いもんを庭に飾れるほど俺は度胸が無い。」

というワケであれば絶対にヤバイやつだ。

「そ、そうです！チツ、もうここまで嗅ぎ付けましたか！」

「えつと……もしかして戦闘とか開始したりするパターン？」

「はい。まあ、勝てるかどうかわかりませんが……」

「そうか。………っては何？冗談とかじゃなくて？テレビの撮影とかじゃなくて？」

「はい。残念ながらマジモンの戦闘です」

「ストップ！それなら人気のないところに行こう！ここを壊されるといういろと拙い！」

弟と幼馴染に何て言われるか分かったもんじゃない！

「ですがアイツがこちらの言うことを聞くとは思えません」

「ちよつと質問。アイツってお前を追ってきたんだろ？」

「はい」

「つっ—ことはお前をこの家から移動させればOKってこと？」

「そうです。ですからこうやって外に行こうと………痛っ」

この少女は一人であんなバケモンみたいなやつと戦ってるってのか
……
なら、俺のやることは一つだな。

「よつと」

「きやつ」

外に行こうとしてた少女を背中に背負う。

さてと……今日の飯までには帰らないと心配かけるからな。

「な、なにをするんですか!?!」

「任せる。足には自信がある」

「ま、まさか貴方……止めてください!これは貴方には関係ないことです!」

確かにそうだ。

これはこの少女の戦いで俺には全く関係が無い。

だけど、女の子が一人でぼろぼろの状態で戦おうなんてしてる光景
を見てはいそうですかと見捨てられるわけがない。

「俺がお前を助けた時点で十分関係者だ。ココの近くの空き地まで
走る。そこに着くまでに状況とかの説明を頼むよ」

「……………分かりました」

「それじゃ……………ゴー!」

俺は玄関を蹴破って外に出る。

空には真ん丸お月さんが浮かんでいる。

もうこんな時間か……………できるだけ早く終わらせるか。

「こつちだバケモノ！」
『グルルウ……ギャワア！！』

よし。誘いに乗ってきた。

これで一応は被害を抑えられたな。

「お前！名前を聞いてなかった！」

「カイン。カイン」ステイトです」

「それじゃあカイン！あのバケモノはなんだ？」

十字路を右に曲がって速度を上げる。

俺のすぐ後ろでドンドンと大きな音を立てながらバケモノが付いてきているのが分かる。

まだ追うのを止めたりすんなよ……

「あれは【邪霊<ソルマツト>】です」

「【邪霊<ソルマツト>】？」

「古よりこの世界を征服しようとする異世界から送り込まれてきた異形の怪物です。奴らは強大なチカラで人間たちを征服してきました」

「征服してきた？ でも今のこの世界は人間がトップの存在だけ？」

「はい。邪霊が強大なチカラを持っているのにこの世界を征服できなかった。それは【精霊<エレメント>】と呼ばれる存在があったからです」

「その【精霊<エレメント>】ってのは何だ？」

目の前のT字路を左に曲がる。

ここを真っ直ぐ突っ切れば空地だ。

「この世界が自分を守るために作り出した存在のことです。彼らは自分たちが選び出した人間と協力して邪霊たちを討伐していました」

「人間と……？」

「彼らは自分のパートナーである人間に特別なチカラを与えて戦いに協力させました。なぜなら彼らだけでは倒せないほど邪霊のチカラが強力になっていたから」

「そうか……よし！着いたぞ！」

空地に着いた途端に急ブレーキをかけて右に横っ飛びする。

するとコンマ何秒か後の差でバケモノが空地の壁に突っ込んだ。

「……で、カイン。お前は何者だ？」

「流石にここまでの説明で分かるでしょう……私がその【精霊<エレメント>】です」

やっぱりな。

助けたときから怪しいと思ってた。

特に髪の色が。

『グオオオオオオ！！』

するとバケモノが咆哮して俺に向かって遊具を投げつけてきた。

「クソッ！動けつての俺の足！」

恐怖で足がすくんで動かない。

まさかこんな死にかたをするとはな……

遊具に潰されて死亡。ははっ、笑えねえ。

「チッ、氷魔法【氷の護り】！！」

キーン！

「……………え？」

「攻撃が来ない……………？
なんでだ？」

俺がおそろおそろ目を開けて前を見るとカインが両手を広げて俺の前に立っていた。

そのカインの向こうには巨大な氷の盾。

これは……………魔法？

「先ほど言いました【精霊】は自分が司る属性の魔法を自由に使うことができます。私の場合は【氷】。相手の時を止めて形を奪う属性です」

「氷……………」

『グオオオオ！ギャブルウ！！』

地面をえぐって巨大な岩を投げつけ拳句の果てには体当たりをしてくるバケモノ。

意外と智能は低いようだ。

「……………カイン。さっきお前が言ってたパートナーってのには俺でもなれるか？」

「！？ ま、まさか貴方、この戦いに自ら参加する気ですか！？」

「好きで参加するわけじゃねえ。こうなった以上他人事じゃなくなつてんだよ。それにコイツを倒すにはパートナーってのが必要なんだろ？ どちらにしろ俺はこの問題から目を逸らすことができねえ。さっきも言つたろ。俺は既に関係者だつてな」

「……………辛いですよ？」

「そんなのもう分かつてる」

「……………死ぬかもしれませんよ？」

「死なないために戦うんだろ？」

「そう、ですか……………分かりました。【我、ここに宣言す。氷の守護者として香坂龍馬なる人間を選出したり。神よ。この少年に氷の力を与え給え】！龍馬、【具現くウエポンく】と念じてください！」

【具現くウエポンく】。

なんか左手に冷たいものが集まってくる感じがする。

それになんだか毎日のように触れているものの形に似ている。

「これは……………弓？」

俺の左手に掴まれていたのは氷を纏った弓だった。

「貴方は弓道か何かをしてるんですか？ぐっ」

「ああ」

「つう……………うえ、【具現くウエポンく】によって生み出される武器はその守護者パートナーに最も合ったものです。そしてそれは氷の弓。まさか大昔の英雄と同じ武器が具現化するとは……………つう」

「大昔の英雄？」

「はい。名前は知りませんがずっと前の氷の精霊の守護者のことです。確かその守護者はその弓で多くの人を守ってきたそうです」

「多くの人を……………」

ガン！ガン！

「つう……………そろそろ盾が壊れますね……………龍馬、その弓の名は【破邪の氷弓くアイシクルブリザードく】。邪霊を一掃する氷の武器です。それでこの邪霊を撃ち抜いてください！」

「い、いや……矢がねえんだけど……」

右手に藍色の【弓掛け】は具現化してるが肝心の弓が無い。これじゃあのバケモノを倒せねえ！

「矢は創造するものです！創造は想像！思い描いてください！貴方が望む矢を！」

「俺が望む矢……」

「きゃあ！」

「カイン！」

ついに氷の盾が邪霊に破られた。体当たりが直撃しちまったカインは気を失って地面に倒れてしまった。

『グルルウ……』

おいおいマジかよ。

コイツ、カインを食う気が！？

「俺の矢、俺だけの矢……人を護れる強靱な矢……」

キンッ

甲高い音を響かせて俺の右手の上に一本の青い輝きを放った矢が顕れた。

これが俺の矢……邪霊を倒せる俺だけの矢……

「こっち見るバケモノ！！カインには指一本触れさせねえ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2238y/>

守護と魔法とエレメント

2011年11月16日23時35分発行